

# ネガティブはイヤ、もつと肯定してほしい 歌と日本人の関係を探る

誰もが歌えるのは『蛍の光』と『君が代』だけ？

やがてそんな時代になりかねないほど、

ヒット曲がわからない。歌はどこへ行っただのか。

歌と世の中の関係を太田省一さんに聞いた。(敬称略)

社会学者

## 太田省一

●おた・しょういち 1960年富山県生まれ。テレビ、アイドル、歌謡曲、お笑いなど、メディアとポピュラー文化をテーマに執筆活動を行なう。著書『紅白歌合戦と日本人』『アイドル進化論——南沙織から初音ミク、AKB48まで』(筑摩書房)、『中居正広という生き方』(青弓社)など。

## 歌謡曲からJ・POPへ

歌のかたちは一九九〇年前後で大きく変わったのではないかと推察しています。それは偶然ですが昭和と平成の境目でもあり、昭和の歌が『歌謡曲』だとすれば、平成に入っからは『J・POP』に変わっていく。呼び方が変わっただけではな

く、社会背景や音楽の楽しみ方自体が昭和と平成でかなり変質したと思いますね。「みんなで歌える歌」から「みんなで歌って踊って楽しむ歌」へ——こういうふうにも表現できるとは思いませんか。

昭和の歌謡曲は基本的にテレビを通して聴き楽しむものでした。対してJ・POPは参加する音楽です。CDシングルを買って聴いて、カラ

オケボックスに行き、みんなで歌って楽しむ。そういうスタイルになってきたわけです。

もちろんJ・POPになってからも、テレビドラマの主題歌を聴いて「いいな」と思えばCDで購入するといった、テレビとの関係性はまだ残りましたが、安室奈美恵をはじめとする「小室ファミリー」の台頭で歌とダンスがセットになり、そこか

ら歌は参加するものに変わっていった。それ以前のアイドル歌手の取っ付けたような振付ではなく、表現としてのダンスがセットになったことは、平成初期のヒットが生まれる仕組みとして大きかったと思います。一方の歌謡曲は、テレビと一心同体で歩んできました。

歌番組の代表といえば大晦日の「NHK紅白歌合戦」ですが、視聴率は八〇年代半ばまで七〇%ぐらいありました。都はるみの引退と森昌子の引退が八五年前後、そのあたりまでは七〇%程度あった視聴率が、以降急速に落ち込んでいきます。現在は四〇%ぐらいでしょうか。視聴率の世界で四〇%といえば、たいへんな数字になりますが、一方で紅白のコンテンツはもはや懐かしの歌などを持っていないと成り立たなくなってきた。

じつは、その年の流行歌と流行歌手だけでは紅白が成り立たなくなっただのが八七年からです。クラシックの歌手や童謡の歌手がこの年から出場するようになりました。それまではアイドル、演歌、ポップスとジャンルの違いはあったにせよ、テレビでよく流れた流行歌の歌い手が、一年を代表する歌手として出場していた。しかしそれが難しくなり、八七年には選考方法を変えざるをえなくなっただけです。

九二年には由紀さおりによる唱歌『赤とんぼ』が紅組のトリになりました。これは紅白の歴史からすると画期的なことでした。それまでトリは、大物演歌歌手であることが不文律でしたからね。

このあたりは、ちょうど「小室ファミリー」が登場してきた時期です。J・POPという言葉はすでにあり

ましたが、テレビを介して一気に広まりましたのがこのころで、誰もが知っている「歌謡曲」に代わって、新しい時代の「J・POP」が力をもち始めた時期と一致しています。

## 豊かさが歌謡曲全盛期をつくる

「歌は世につれ世は歌につれ」という言葉がありますが、流行歌と時代や世相は切り離せません。

七〇〜八〇年代は、戦後の日本がいちばん元気だったときです。高度経済成長によって景気がよくなり、人々の中には高揚感があつて、総中流というマスの意識が生まれた時代です。

敗戦後の国民が一致団結して頑張り、それが暮らしの豊かさにつながっていく。そうした変化を象徴していたのがテレビです。ほとんどの家